

火炎に包まれゆく野呂さん

永代美知代

皆様はよく元祿快擧の義士傳で、講談師がお話し致します大石内藏助書行燈の一件と云ふのを御存じで御座いませう。

これは若い頃の内藏助、つまり君家に事のなかつた時代の内藏助が、別段これと云つて取り立てた功も立てず、寧ろ普通以上にぼんやりして居たと云ふので、家中の者共が大石の書行燈とあだなをつけたのだといふのです。

書行燈とあだなされた内藏助が、その後、事ある度に功を立て、遂には五萬三千石淺野の家に過ぎた家老とまで、世間から評判されまして、あれほどの快擧の頭取と仰がれました。

世間にはこの書行燈のやうに、一寸見た眼には、如何にもぼんやり閑として居て、伶俐なのか馬鹿なのか、一向解らないのが澤山御座います。そしてどちらかと云ふと、大抵はみんな氣の利かない、薄野

呂かなにかのやうに思はれてるのが多いやうです。私の昔のクラスメイトにも、さう云ふのがあります。

××女学校の三學生で、野呂お千香さんと云ひますと、名代のぐづやで、私達もよくその方の事を云つては「名稱自詮、ぐづやの野呂さんとはよく出て来るわねえ」なんて、こんな甚い悪まれ口を、陰へ廻つては利き合ひましたつけ。

野呂さんは全く薄野呂に見えました。

どうかして友達に足を踏まれたりしても、野呂さんは格別怒りもせず、不平がましい事一つ云ふのでは御座いません。たいそつと、心持ち眉をひそめて迷惑がる位が關の山なのでした。

「アラ、御免なさい、お痛くつて？ 御免なさいね、済みません」とか何とか、これが野呂さんでなくて、他の方を踏んだのでしたら、詫言の一つ位云はなくてはなりませんのですけれど、相手が薄野呂の野



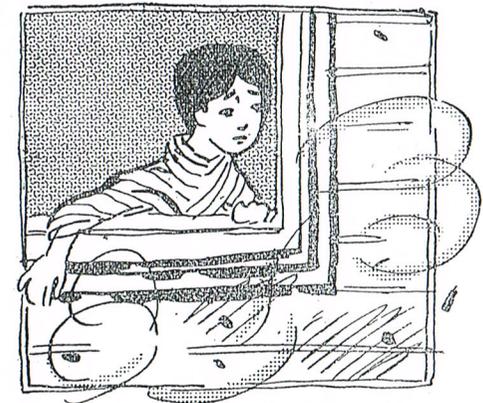
呂さんと、決してそんな詫言なんか云ひません。「何です野呂さん、そんな處にまご／＼まごついでらつしやるから悪いんだわ、何故早く彼方へ寄つてらつしやらな

いの、そら。愚圖々々して

つしやると、また踏みすすよ」なんて、踏みつけた上に、こんな亂暴な事を云つたりするのです。

それでも野呂さんは黙つて、隅つこへ寄つて行きまして、踏まれて痛む足の爪先へそつと手を當て、あると云つた有様でした。ですから私達クラスメイトは勿論の事、同じ寮舎に寄宿した下級生達からまで、ヤレ愚圖やの野呂さん、薄野呂さんなど、大變

なあだなをつくられて居りました。



ですが野呂さんは、全くの薄野呂ではないのです。その證據に、餘り才氣走つた處がありませんから、自然引込み思案の愚圖にも見えませけれど、學課の出来

も普通以上なのでした。

何時か新任の松田先生が斯うした感想をお話になつた事がありました。

「一體世の中と云ふものは不思議なもので、私にしても、此方は屹度出来るだらうと思つてゐた方が、案外お出来にならなかつたり、此方はとても駄目だと思つたのが、案外好い點をおとりになつたり、一寸表面を見ただけでは、全く解りません。」

併し私達は矢張り野呂お千香さんの表面ばかり見て、その眞價を知らうとはしませんでした。

すると、二月のある夜の事でした。私達はジャンジャン、ジャン／＼烈しく鳴り響く警鐘に呼び覺されました。

「ソラ火事だ！」

云ふより早く飛び起きて、電燈をひねる、帯をしめる、それは／＼大騒ぎでしたが、火元が學校裏のパン屋で以て、もう此方の建物へも燃えついたと解ると、また一倍の大混雜になりました、聲をあげて

泣く人があるかと思ふと、折角綺麗に詰まつてゐる行李を其處ら一杯に打明けたり、みんな周章で返つて、とんなま眞似ばかりするのでした。

「皆さん、お荷物なんか如何でもよろしい、お惜しい品もおありでせうが、この場合です、お棄て下さい、もう此方の寮舎も燃えさうです！」

舎監の先生が斯うお觸れ歩きになりましたも、どさくさ周章で切つた生徒の耳には入りません、上草履一つかへてお廊下を彼方へ行き、此方へ行き、うろついて居るやうな方が澤山ありました。

「もう此方へ火が廻りました、早く、早くお逃げなさい。」

疇走つた舎監先生の聲が聞えますと、又一しきり泣き騒ぐ聲で凄じい。一同が講堂裏の廣つばへ集まつた時、黄色い火焰の舌は今しも北寮の欄干をなめやうとするのでした。

「あ、もう燃えついた！」
わな／＼震へながら其方を見入つた私達は、思は

ず叫び立てました。

「あ、あ！ どうしませう、佐野さんが、先生、佐野さんが！」

北寮の二階の病室に、たつた一人寝てゐて、取り残された佐野さんが、痩せ細つた力無い手を窓にかけて、眞蒼な顔に悲痛な色を湛へながら、じつと此方を見詰めて立ちました。

「おう佐野さん！」

舎監先生の胸ははり裂けましたらう。

「誰か、早く、誰か佐野さんを救つて下さい！ 狂気のやうに叫びながら助けを求めて、其處此處

駆けてお廻りなさる。

「佐野さん、待つてらつしやい、今に先生が誰か見つけて來ますから。」

生憎あたりには適當な救ひ手もありません、舎監先生が空しく氣を揉んで驅け廻つてらつしやる間に、火焰は容赦もなく燃え廣がつて行くのです。

「佐野さん、今行きます。」



斯う云つたのは思ひ掛けもない野呂さんでした。私達一同は云ひ合せたやうに、野呂さんを不審な眼に見守りました。と、その間に野呂さんは素早く私達の間を摺り抜けて、北寮さして駆け出しました。

「まあ、野呂さん、一寸と野呂さん。」
上級生の一人が呆れたやうに呼び止めましたが、

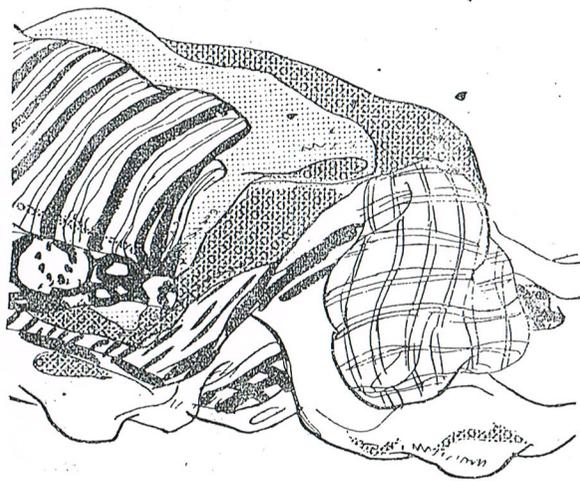
野呂さんは振り返らうともしませんでした。

「野呂さんてば、如何なさるの。」

「早く行かないと、佐野さんが焼け死んでしまひますもの。」

走りながら野呂さんは答へました。

「だつて、あなたが行つたら、二人で焼け死ななけ



ればなりませんわ。』

二三人の上級生が後から駆けつけて、無理にも引止めやうとしましたが、野呂さんはどうしてもきません。

『そんな事を云ひ合つてるまに、梯子段が燃えて駄目になりますわ、大丈夫、私をやつて下さいな。』
云ふより早く、燃え上つた北寮の二階へ駆け上つて行きました。

『本當に何で方でせう?』

私達は今にも愚圖やの野呂さんが、傷しい死骸になつて、佐野さんと一緒に連れ出されるのを見るやうに思ひました。ですが、ほんの一分か二分の後、野呂さんの姿は北寮の二階に見えました。而もその手には蒲團を抱へて居りました。

『野呂さん、早く、危いから早く!』

私達は唯もう夢中で叫び立てました。

野呂さんは何にも云はないで、四周を見廻して居りましたが、一番火の手に遠い西側のお廊下へ廻つて

病室の窓につかまつた佐野さんは、じつとそのまま悲痛な様に立盡して居りましたが、やがて野呂さんはその前に背を差出しました。

『おんぶしますから、確乎つかまつて頂戴。』

『有り難うよ野呂さん!』

佐野さんの蒼白めた頬を傳うて、涙が止めどもなく流れて落ちました。

佐野さんを負つた野呂さんは、例の西側のお廊下へ出て來ましたが、欄干につかまつたと思ふと、すぐ外側へ廻つて、僅か三四尺の高さを、積み上げた蒲團の上に、ひよいと飛び降りました。

『まあ野呂さんが!』

思はず斯う叫ばないではゐられませんでした。

『お怪我は無くつて?まあよくねえ野呂さん!』

誰も彼も、心から野呂さんを嘆稱しないものはありませんでした。

(完)

行つたと思ふと、突然持つてゐた蒲團を其處から下へ投げ落すのでした。

『蒲團なんか如何するのでせう、馬鹿臭い眞似ばかりなさるわね。』

一同はそんな風な事を云ひ合ひました。すると野呂さんは、また蒲團を運んで來て、ほいと下へ放ります。

『野呂さん、そんなもの出さなくなつて可いのよ、危いから早くお降りなさいつてば、早く、早く。』

『駄目です、もう梯子段が焼けてます。』

野呂さんは相變らず落つき拂つて、斯う返事しましたが、せつせと蒲團を運んでは、ほいと放ります十疊か二十疊か、それとももつと澤山な蒲團が放り落されたのでせう、蒲團の高さは西側のお廊下から三四尺の處まで積みあげられて居りました。

火焔はもう、いよ／＼盛んに燃え廣がつて、見て居る私達は、たゞ冷汗になつて騒ぐのでした。

『野呂さん、佐野さん! 危いから早く!』